様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006～2009
課題番号：１８５２０５４７
研究課題名（和文）　戦時期重慶国民政府・南京傀儡政権・日本・華僑の四極構造研究

研究課題名（英文）　The 4 Poles Structure of Chongjing national government, the Nangjing puppet government, Japan, and Overseas' Chinese during Anti-Japanese War.

研究代表者
菊池　一隆（KIKUCHI　KAZUTAKA）
愛知学院大学・文学部・教授
研究者番号：００１５３０４９

研究成果の概要（和文）：日本・重慶国民政府・傀儡政権・華僑という多角的視点から、研究の少ない戦時期における樺太・北海道、それを除く日本、台湾、朝鮮、そして日本軍政下の南洋各華僑の実態と動向について解明した。その際、不明点の多い日本・台湾・朝鮮・南洋の華僑各学校教育に関してもその実態を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I approach Overseas' Chinese from the viewpoint of Chongjing national government, the Nangjing puppet government, Japan, and Overseas' Chinese during Anti-Japanese War. Consequently I explicated the Anti-Japanese or pro-Japanese movement of overseas' Chinese under the rule of Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００６年度 | 1,000,000 | 0 | 1,000,000 |
| ２００７年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| ２００８年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| ２００９年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,100,000 | 630,000 | 3,730,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：中国近現代史、抗日戦争、華僑、政治力学、「大東亜共栄圏」

１．研究開始当初の背景
(1)本研究は、華僑研究は増大しているにもかかわらず、戦時期については複雑であり、そのため、研究空白期として残されてきた。しかし、この時期を除いて、華僑史の全貌は正確に明らかにできないと考えた。

(2)従来、日本華僑が全体としての実態が明らかにされていなかった。すなわち、日本国内の函館、横浜、神戸、長崎各華僑についてはそれぞれ研究蓄積があるが、地域的に分断され、それらの関連、もしくは日本の中での位置づけが不明であった。

２．研究の目的
(1)戦時期における日本国内の函館、横浜、神戸、長崎、さらに沖縄各華僑の実態と動向を探究する。神戸とか横浜とか地域的に分断せず、日本規模での動態を明らかにする。樺

太華僑を歴史開拓的に研究し、北海道華僑との連繋・断絶を探る。このようにして、「抗日」、「親日」動向がどのようなものであったのかを解明する。その際、日本政府、中国公使館の動きにも注目することで立体的、かつ構造的分析をおこなう。

(2)日本植民地の台湾「華僑」、朝鮮両華僑の実態と動向を明らかにする。台湾「華僑」に関しては、元来、福建省出身の多い地域に福建・広東系中国人が「華僑」として入り込むわけで、複雑な様相を呈した。したがって、日本も極度に警戒した。そうした実態を明らかにする。第２に、朝鮮であるが、万宝山・朝鮮事件での朝鮮民衆の華僑虐殺暴動の研究を深化させると同時に、日中戦争時期における朝鮮華僑の実態、抵抗、及び汪精衛政権の領事館も抵抗を開始した実態に迫る。また、日本軍政下における南洋華僑の実態分析をおこない、その特色を導き出す。特にシンガポールにおいては、占領時期、日本軍による華僑大虐殺事件である大「検証事件」があったが、その実態と、その後の華僑の「媚日」と「抵抗」を明らかにする。特に抵抗では、共産主義系の人民軍のみならず、国民党系、第３勢力系、秘密結社に分けて論じる。

(3)華僑学校教育に焦点をしぼり、日本、台湾、朝鮮、南洋の各華僑教育の実態と特色を明らかにする。これは、統治・ナショナリズムとの関連で看過できない。また、日本、台湾、朝鮮、及び南洋それぞれに異なる形態をとった。それを解明したい。

３．研究の方法

(1)戦時期の樺太華僑については、日本における史料は極めて少ない。そこで、ウラジオストク科学アカデミー、同公文書館、及びサハリン公文書館などに行き、収集した史料などで解明する。日本華僑については各地の大学や研究機関で、例えば国会図書館、東洋文庫、小樽商大、鹿児島県立図書館奄美分館などで調査・収集した史料を読み直し、また新たな史料で補強作業をおこなう。

(2)台湾の中央研究院近代史研究所、同台湾史研究所、台湾大学、国史館などでの史料調査・収集をする。また、台湾師範大学の呉文星氏ら研究者、関係者にレビューを実施する。ただ台湾華僑については、戦争末期の状況に不明な点が多いので、重点的に補強史料を探す。また、朝鮮華僑に関しては、東洋文庫所蔵の汪精衛関係文書を中心に再検討をおこない、かつ補強資料で戦時期、朝鮮華僑の動態と構造を解明する。なお、万宝山・朝鮮事件は重要問題なので東北師範大学関係者などの支援を受け、現地調査をおこなう。

(3)南洋華僑については、シンガポール国立大学等で調査・収集した日本軍占領後のマラヤ・「昭南」（シンガポール）の実態や対日抵抗の解明をさらに進めると同時に、日本軍政と華僑との関連について考察を深める。また、南洋でもマラヤ・シンガポールのみならず、ベトナム、タイ、フィリピン、インドネシアなどとの関連にもアプローチする。

(4)日本、台湾、朝鮮、南洋の各華僑教育の実態に関しては、日本や現地調査ですでに入手した史料、及び科研で購入した図書を含めて分析、推敲を加え、それぞれの実態を解明する。その後、それらの有機的関連、共通性、差異についてアプローチする。華僑学校教育は前述したごとく、政権の質、目的、統治と密接に関わる問題であり、重点的に明らかにする。

(5)最後に、以上のことに総合的に考察をくわえ、戦時期における「大東亜共栄圏」下での華僑の動態と有機的関連を重慶国民政府・南京傀儡政権・日本・華僑の４極構造から解明する。

４．研究成果

(1)戦時期の状況、背景を明らかにしながら、華僑のみの研究から脱却して、重慶国民政府、汪精衛の南京傀儡政権、日本、華僑との４極構造を設定し、政治力学的に分析を加えた。その結果、戦時期における日本、植民地台湾、朝鮮、さらに日本軍政下の南洋華僑について、ほぼ全貌を解明することができた。個別的には、戦時期の樺太華僑については解明でき、北海道華僑との融合・離反の関係も明らかにした。これは従来研究が希薄だった問題であり、特に樺太華僑については大きく進展させたものといえよう。また、元来、函館、横浜、神戸、長崎各華僑に対して、「東京華僑」という概念を作りだし、政治的に良くも悪くも重要な役割を担った「東京華僑」についてその実態、動向を政治面から解明した。その他にも、各地華僑については研究を新たな視点から大きく前進させた。

(2)「日本国内における在日中国・『満洲国』留学生の対日抵抗について」（以下、下記の発表論文を参照されたい）で、対日抵抗を中国共産党系のみならず、国民党系、第三勢力系に分けて特質、共通性と差異、及びその意義と限界を論じた。従来、日本政府、中国国民政府の各中国人留学生対策としてとりあげられることが多かったが、本研究では、それらを基本的に押さえながらも、日本の中国

への圧迫が強まる中、日本国内における中国、「満州国」各留学生の対日抵抗を真っ正面からとりあげた。その結果、これら留学生は高級幹部、軍幹部などの子弟も多く、日「満」提携を打ち出す日本にとって、ただ弾圧すれば良いという問題ではなく、頭を悩ませざるを得なかった。

(3)「抗日戦争時期における台湾『華僑』の動向と特質」で、台湾華僑をとりあげ、1931～37 年、1937～45 年に分けて日本総督府による弾圧、華僑の動態と特質、及び台湾人との関係などに論及した。前述したごとく台湾「華僑」はいわば元来、福建人が多く、その中に入ってきたため、台湾では中華街が形成されることはなかった。日本はこうした状況が、台湾人の中国人としての民族主義に火を点けることを恐れ、「アメとムチ」の政策をとった。台湾自体が日本の南進政策の前進基地という重要な地理的位置にあるため、当初、台湾「華僑」を南洋華僑への説得工作に利用しようとしたが、十分な成果をあげることができなかった。したがって、太平洋戦争が進むに伴いむしろ台湾籍民（台湾人）の積極利用へと転換していくことになる。そうした事実を明らかにした。

(4)拙稿「抗日戦争時期における朝鮮華僑の動態と構造」は、重慶国民政府時期から汪精衛傀儡政権に至る朝鮮華僑の動態の転換を総督府、公館などの動向と絡めて明らかにした。その結果、当時、対日抵抗がないとされてきた朝鮮華僑の武力抵抗、公館の抵抗を浮かび上がらせた。これらの抵抗は看過されるか、ほとんど知られていなかった。しかし、朝鮮華僑の武力抵抗は中国八路軍の朝鮮半島への浸透という観点から無視できないし、かつ領事館の抵抗はその傀儡性評価を再考察させるに十分である。また、中国吉林省にある万宝山の現地調査もおこない、中朝農民の衝突、朝鮮民衆の華僑虐殺暴動の研究を深化させた。これによって、中国人・朝鮮人・日本人が単純な支配、被支配の関係にあるのではないことを解明した。

(5)拙著『中国抗日軍事史 1937-1945』は通史であり、戦時期に焦点を当てており、いわば本研究の背景をなすものである。日中戦争から太平洋戦争に至る過程で、なぜ弱国中国が強国日本に勝利することができたのか。なぜ中国は日本の予測通りに敗戦しなかったのか。いかなる変動があったのか。それと華僑の動態はいかなる関係にあるのか。それを世界華僑全体を通観する形で執筆した。そして、第六章には、「世界華僑による抗日支援ネットワーク」を組み込んだ。これによって、マクロ的視点から世界華僑にアプローチすると同時に、今回の明らかにした日本、台湾、朝鮮、そして南洋各華僑の位置づけに考察を加えた。

(6)拙稿「日軍政権下的新馬華僑華人教育」は、日本軍政下におけるマラヤ・シンガポールの華僑学校教育に焦点を当てたもので、中国語教育を巡り日本軍の方針が動揺したことを実証的に明らかにしている。すでにこれと同時に、日本の華僑教育を横浜、神戸を中心に明らかにし、台湾では唯一華僑学校が設立されなかった背景と理由を、その実態から考察を加えた。間違いなく中華ナショナリズムとの関連がある。朝鮮では、二〇数校という数多くの華僑学校が設立されたが、それは朝鮮華僑の仕事と分散居住との関連があった。このように、華僑学校教育に関しては、日本、植民地台湾、朝鮮、日本占領下の南洋という日本支配下のそれらの解明は基本的に終わった。

(7)以上のように、研究計画通りほぼ研究を完遂し、従来、未開拓なまま残されてきた研究分野を含めて多くの新たな事実、構造を明らかにし、思っていた以上の成果をあげることができたと自負している。これらすでに発表した論文を含め、加筆、削除、修正、補強し、結晶化させて、近い将来、専門書として出版する計画である。ただ遺憾ながら、戦時期の欧米華僑に関しては新研究のため、手こずり、研究継続中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）


①菊池一隆「日軍政権下的新馬華僑華人教育」『新世紀学刊』（シンガポール）、査読無、第 9 期、2009、pp. 76-81.
②菊池一隆「日本・中国・台湾の高校歴史教科書の相互比較と検討」『愛知学院大学文学部紀要』、査読無、第 39 号、2010、pp. 29-69.
③菊池一隆「日本国内における在日中国・『満洲国』留学生の対日抵抗について－戦時期、日本華僑史研究の一環として」、愛知学院大学『人間文化』、査読無、第 23 号、2008、pp1-46.
④菊池一隆「抗日戦争時期における朝鮮華僑の動態と構造」『近きに在りて』査読無、第 51 号、2007、pp. 69-80.
⑤菊池一隆「抗日戦争時期における台湾『華僑』の動向と特質」『愛知学院大学文学部紀要』、査読無、第 36 号、2007、pp. 1-40.

〔図書〕（計２件）
① 菊池一隆、有志舎『中国抗日軍事史 1937-1945』、2009 年、全 393 頁。
②菊池一隆、日本経済評論社『中国初期協同組合史論』、2008 年、全 425 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
菊池　一隆（KIKUCHI KAZUTAKA）
愛知学院大学・文学部・教授
研究者番号：００１５３０４９

(2)研究分担者
無

(3)連携研究者
無